江都六地蔵尊勧進帳

C 40
2736

六地藏建立の内[illegible]
奉加勸進之一人も[illegible]

天下安全　武運長久
佛法繁榮　衆人快樂

御こゝろざしのかたハふか川へ
すぐにおとゞけ下さるべし

歸命地藏尊

武江六地藏尊

金銅佛丈六之圖

勸化沙門　深川　地藏坊正元

江戸六地蔵造立勧化書目録

一 釈尊滅後の衆生を地蔵へ附属并六道能化の事
二 地蔵菩薩因位発心并現当利益乃事
三 地蔵菩薩古今霊験并修行乃六道を勧む事
四 六地蔵の縁起名号并六地蔵建立志趣の事
五 釈尊地蔵へ末後の衆生を観音并に附属の事
○帝都東都并六地蔵出現之別記

女中子どもたちにても信易からんために地蔵菩薩の利益をことごとく仮名にて書くは見安く末の出事なり

一 釈尊滅後の衆生を地蔵へ附属并六道能化乃事

夫地蔵菩薩の功徳広大なる事ハ仏だに恒河の沙劫の間説ことも尽しとのたまへりいはんや凡下の愚なるものをや然ども童男童女の信を勧んが為に聊大海の一滴を述ん凡法佛菩薩の果徳何の勝劣いづれかあらそふことも分てかくしされども因地の誓願各異にして衆生乃機縁と違ふるれバ偏に同じこの事を執もしらず爰に地蔵菩薩乃悲願ハ諸仏大菩薩に勝させたまひ末世有縁の菩薩なりと成いはんとなれバ

地蔵本願経をあんずるに昔忉利天上大会
の時諸仏菩薩乃中において世尊滅後の一切
衆生を普く地蔵菩薩へ附属したまひてしきりに
偈を説たまふ現在未来の天人衆生を吾今慇懃
汝に附属す大神通方便を以て度してまく
れ悪趣に堕在せしむることなかれこ○志かれバ
釈尊入滅の後弥勒菩薩乃世に出させたまふ迄
の人間天人地獄餓鬼畜生修羅の六道を輪
廻する一切の衆生ハ皆悉く釈尊より地蔵
へ附属を請させ給ひし衆生の一生にあせる所乃
善業悪業共に地蔵并に判断なしあたへから

すこしものはなし則閻魔王身を現じては
一切衆生の作悪を静め地蔵と現じたまひてハ六道
に遊化して苦を抜楽を与ふ地蔵占察経
乃讃嘆の文にも六道能化の救世大士二仏
中間の大導師と説け然れバ則我と衆生ハ
既に地蔵菩薩の恩顧乃者也何ぞ六道一切の
衆生理らして豈此菩薩を仰ぎ敬ざらんや受
て今此世の衆生ハ地蔵菩薩乃済度の機に
捨者まりしを故ハ今已に仏の滅後五ゝ百歳
の始めなる時己に末法悪癡らんごの初小あれり
五濁の衆生煩悩強盛悪業深しいんで三途を

免るゝ事をゑんや故に地蔵菩薩ハ佉羅陀山に於て
諸大菩薩の中より唯一人撰出されさせ給ひ仏の
滅後末法悪世罪苦の衆生ハ現世未来を能く
導きたまへと告させ給ふ実に於て此菩薩の利益広
大なる事明なり又地蔵十輪経に曰弥勒文殊観世
音普賢等を上首として恒河沙の諸大菩薩
とも一人として百劫の内礼拝し恭敬供養して所
願を求めんよりも一食の間に此地蔵菩薩を
礼拝供養せんにハ功徳甚多不思議に所願速に満
足する事をゑんを以の故に此地蔵菩薩ハ一切
の衆生に於て能く大に饒益し如意の寶と成

なるが故なりと化して又蓮花経に云勝軍地蔵といふハ首に
冑を戴身に鎧を着帯に太刀をさし弓箭を帯したま
ふに旗を標し右手に剣を執軍陣に臨に向ふ敵ハ
秋草の風に靡がごとしと云々或ハ破軍地蔵
蔵と現じ普天の災難を退率土の凶徒を拂此地蔵
乃威神力にて過さるハなし又延命地蔵経に地蔵菩薩の曰
我毎日晨朝に諸の定に入諸の地獄に入て苦を
離しめ無仏世界に於て衆生を度し今世後世を能く導
若仏の滅後一切の男女我が像をゑんと欲バ日出を向て不
浄を洗ひ乃至此経を読誦し我名を唱バ我此眼威神力を
以の故に業報を転して現の果を得せしめ無

除将小菩提を得已乃至諸の衆生を悉く仏道を成ぜしめ先
て後我成仏せん也一人も残さバ我成仏せじとの大誓ハ
是難き大慈大悲の御誓也むかし菩薩の身を現じて
時ハ諸の不浄をも忌たまはずして衆生縁を結び給へバ
順縁も逆縁も共に導き給ふ然れども愛宕山大権現と
顕れ給ひてハ諸の不浄を殊に忌せ給ひ理趣将を忌給ふ
もろく縁族共に諸の障を除き幸運を守らせ給ひ火災の難
を除給ふ也我此社神へ一千日の日参を運び武運長久に戸の
於て六地蔵尊を建立せしめんとの願を後を祈る又孫
陀如来の因位法蔵比丘の昔ハ法蔵ハ則その地蔵尊也仏
と現れ給ひてハ諸仏を世の為に立給ひ諸仏の浄土に勝る

乃極楽世界を建立して念仏の衆生を来迎引
接ある又菩薩の身を以ハ閻浮提救世の大誓を起て
念者の衆生を導き給へり

㊁地蔵菩薩因位発心並現当利益の事

本願経を案ずるに地蔵菩薩ハ元女体にて母
孝なりける不久遠劫の昔覚華自在王如来の像
およびて発心しまさの大きさに誓ひ一切
積て今善業の大并ミ為せるて悲心を身一
仏ふく衆生成生を情あり現世未来の苦悩を
尋給り○因位女体の縁より女人乃菴を
度させの大家とハ女人ハ貴賤老若共に信をと

阿州中村
今年四百

地蔵菩薩に縁を結者ハ悪しき事を遁し能納乃
障なく安産の紐を解せんとなり又懐胎の内
父母心を合一筋に地蔵菩薩を念せバ生るゝ子ハ
徳の生を得る事十之一ツハ端正無病二ツハ寿命
長遠三ツハ聰明利根四ツハ無病息災五ツハ
無水火災六ツハ衣食満足七ツハ佛神擁護
又子孫老去のためハ端正延命の子を与給んと
なり此故子安の地蔵後弟の地蔵とせり故
奉るも現世にても未来にても童男童女を拝よ
我等も皆悉く次に地蔵菩薩と念じ
人ハ自非業の死を免延命の徳をうく旨地蔵

菩薩の十二大願の中ふも一切の衆生ふ短命を
延く壽を命るにこゝを命を延ずんバ我正覚をとらじ
とのたまへ經の中ニ多く現存ふ壽命長遠の
利益を説り次ふ地蔵菩薩を念ずる人ハ衆生ふ臨終の時
ふして迎りもさゝくむ地蔵菩薩の仏乃會座へ来て
給んとする瑞相ふハ大衆の手に内へ各自然ニ
如意珠を現し宝となりしのりし云云想て貧乏者
ハ為ふハ如意の宝を以て給ふと説り次ふ地蔵菩
薩を念ずる人ハ聰明利根の性をふつくゝ人の寵愛を
得て貌を美しく男女も見目と立し和去ね
人ふ愛敬せられずんバ望つとも叶難らし經の中

ハ廣衆人愛敬聰明智恵の利益を説り次ふ地
蔵菩薩を念ずる人ハ悪く邪氣の悪病を得ても
業病とも相治して諸の病苦を救ひ給ふ經の中よ
多く疾疫不除衆病悉除の利益を説り次ふ地蔵
菩薩を念ずる人ハ諸の火難よ於て命を捨ても
水難ふ於て身を滅ども或ハ盗賊の難ともまぬかる
經中ふ多く無水火災無盗賊厄等乃利益を説り
次よ地蔵菩薩ハ五穀成熟を離ちせ給へ尤も人多
乃耕せる人ハ田畑ハ其一回一卿分く随こに能との
萬民念ずる時ハ一分にての耕作勝く經の中ニ廣
土地豊饒五穀成熟の利益を説り想て萬物ハ皆

地より生ずる宝は是蔵に納る万物万宝共に地蔵
の二字に摂まり次に地蔵菩薩と念ずる人は
梵王帝釈日夜に離れず擁護せんこの功徳又堅
牢大神力地神及び諸の眷属の神日夜に守るのみ
ゆへ諸の災難を除この功徳也地蔵菩薩と念ずる
人は刀兵の難を遁れ諸毒に害せられず速に
怨敵退散すと説玉ふ次に地蔵菩薩と念ずる人は
六道の罪業を悉く消滅し速に仏道を成せしめ
往生極楽迷悟聖地諸大菩提の利益を説玉ひ現
世の諸願成就もとも未来菩提を説ぜずんば究竟の
悲願に非ず故に二世の利益を演説し給ひ度衆に

是難き功徳あるべし凡罪の至て重は五逆罪の輩
て堕るは無間地獄なり善果此罪無上なるは菩提の
故に地蔵菩薩と念ずる人は五逆の罪を滅し無量
の業を消て菩提を説ぜしめ給ふ是経文に明らかに況
薄羅那地獄の業因に於てや

㊂地蔵菩薩古今霊験最も帰仰のものを勧度
釈書に云首和列矢田寺の満米上人は冥途に
て地蔵菩薩の告て曰我世に為に附属を請く地
獄の猛火を恐れず大慈悲心をもつて罪人の苦に代
諸の衆生を化度し平等の慈悲を行ずと雖
無縁の衆生は済度する事難し汝人間に帰らば

六道の衆生に告く是に縁を結しめ並に地獄の苦
を免しめよとのたまへり地蔵菩薩に一度も縁を
結し者ハ永く悪趣を離れ現世安楽にして後生善
行て救ふ又許ハ結城上野へ入ハ鎧の袖に地蔵
菩薩の名號を一度書付し縁に寄て忽ち地獄の
苦を免粟田の老女ハ一度地蔵講にあひて功徳を
蒙く地獄を出く蘇生天龍川に於て童子と戯
て砂に地蔵菩薩の形を畫く荒水に難を免き
於摩の須の盲目ハ地蔵菩薩を念じてたちまち双眼
を開釈乃蔵海も短命を恐く地蔵菩薩を念じ
て示現を得く九十年の命を延極楽に往生

の為ハ地蔵丼のか護をもて安産乃帯と為治湯の
竹林長者ハ无量苦を然く地蔵丼を念く如意
宝珠をえて福徳自在の身と成ぬ海邊の漁夫ハ此
丼を念く盗賊の危難を遁れ叡蔵好ハ別く絶根
如し[illegible]地蔵丼を念く智恵辨舌を得る本好乃
小女ハ地蔵丼を念く愛敬の德をもく人の妻と
成香句剃髪の為孝ハ地蔵丼を念く剣戟乃
難を遁れ鴻乃[illegible]ハ此丼を念く火難を遁れ同
同の包改ハ地蔵丼を念く衆病を遁れ産の秋定
蔵ハ冥途に一く此蔵丼ハ一の偈を授て多羅人
を助く横目資列の刺史ハ地蔵丼を念て佛上

風波の難を遁れ或ハ轂を懸せ或ハ毒害を救ふ浄土
往生を得るあり是ハ木の説(?)厄(?)君約(?)[illegible]万こ云起を
志(?)[illegible]粗古と地蔵靈験記木の書に見ゆ○志ある
らん人ハ地蔵丼の木像あるいハ絵像あるいハ形を求く
供養をし家内よ遊てと身に持てと法乃悪魔
無神無鬼ぞくをと良能と此丼の威神力不可思
議なれが故よ或ハ難火難剣難毒害及法の災難を
除あらハ之を苦行及ハ発心日々に都て永く退ざるゝと
まゝせ給ふも此丼の誓に色さるハなし又法の悪業
と作大地獄に落て千劫万劫の間焦熱大焦熱の
炬小身を焦し或ハ大紅蓮大紅蓮の氷に閉られて無

是の苦を受く地獄のあまた罪人も行て救せらる
其時行文よ勝之善人も悪人も疑くも志を起て親く
此菩薩に縁を結奉りし又過去の父母諸眷属の為に地
蔵菩薩を供養せハ未来三途の苦を離安楽を得せしめ
玉ふ又先達し稚子の為にも我身の為にも毎日
思出く六地蔵への志あらは念仏并に地蔵の御名号
我人心に任せられて日毎に六遍唱て回向せしかれハ善
根の種を蒔て地蔵菩薩の功徳不可思議なるが故に廣
大の利益を得る又志を起く毎日百遍唱ハ現世法の
障り除安楽に住せしめ當来必成仏ならんと又前の悪業
に引く三途に堕罪することを苦よ代て解脱を与んとの

地蔵十王経に云へり況や千遍万遍に及功徳をや
もし地蔵菩薩の御名を唱ハ是も易行之散乱の心不
浄の身とも称せられて只南無地蔵大菩薩と唱る
斗にて無量の功徳を得現世未来の諸願を成せしめ
あらし濁世衆生の慈悲の利益成ることを知るべし
空く一生を送無縁の衆生を救行の誰か不然し思せ
を重病を受て死乃門に至の時悔て何そ益に立んや
人に地獄日夜をそし将と極流すれども助く
さる時獄卒ハ呼喚の声雷のことく響渡る眼ハ
焦熱の炬燃のことくに立光らん時ハ其身を消見にあるを
砕さんや時よ当く男女妻子の親身も世間べからず

せん畜生ハ含眼珠玉も果て何の用ぞやわく痛ける
自業自得の果なれバ誰か之に代らんや足を擂首せ殺
血溜の血潮を染る咽に迫て悔ん道なし然りいま
地蔵菩薩の御慈悲も甚しき去ハ幾らもかくし我ハ
或彼が苦に代て罪業を免ぜ或自の浄土へ導く安
楽を得せしめ或又衆生を済て極楽仏の浄土へ登らせ
こゝより勉へ入て同体仏性の宝を捨て三毒の泥
に埋五欲の境に迷日々に種々の悪業を作れ六道に
流浪をれハ誠に淋ましからずや衆生此理を知と雖も
多ハ散乱の風に飄され今体得することかなし其ハ
無明の闇見ずれハ心妄念妄見を止て偏に此菩薩を恭敬し
供養して自他同二世の利益を成就せん事を

四

六地蔵之圖

當像ハ蓮華三昧経に見へたり
寶号ハ十王経に出る所なり

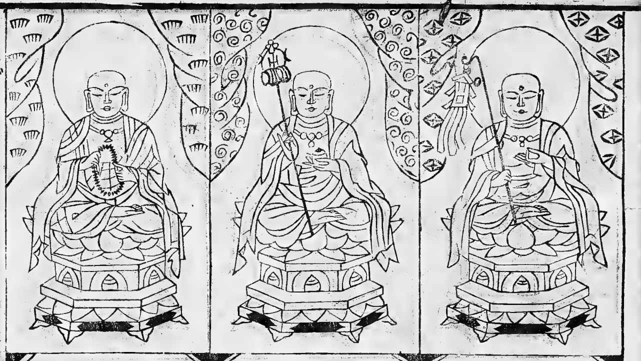
畜生	餓鬼	地獄

金剛願地蔵。此ちぞうぼさつハ地ごくに入てかへくりうくのぢごくの苦をすくいたまへり 此そんぞうをねんずる人ハ火難水難をのがるゝなり

金剛寶地蔵 此ちぞうぼさつハ餓鬼だうに入てもろもろのがきのうへのくるしみをすくひたまへり 此尊ぞうをねんずる人ハ衣食ゆたかにしてうれひなし

金剛悲地蔵 此ちぞうぼさつハ畜生だうに入て諸のちくしやうの苦をすくひ給ふ 此尊ぞうを念ずる人ハころりやうく及りうくのちくしやうの難をのがるゝなり

蓮華三昧経本朝へ傳来由来ハ地蔵廿一秘記に見へたり



修羅　人道　天道

金剛幢地蔵

此地蔵尊は修羅道にて闘諍のくるしみをうけるまんとうちあひ其苦をすくひ給ふ此尊像をねんずる人はいさかひ闘諍のつみ人をのがるゝなり

放光王地蔵

此地蔵尊は人道にて八苦をすくひ衆生をまもり給ふ世の人此尊像をねんずる人は長寿をえ又病人のあいは子を産女の産の苦を免れ寿命長遠なり

預天賀地蔵

此地蔵尊は天人をまもり給ふこの尊像をねんずる人は天人の五衰をのぞき福徳をあたへ給ふなり

右六地蔵は是をまつらくありといへども一躰をねんじ奉る内には六躰のりやくをうるなり

當國六地蔵造立の意趣

抑予十二歳の比古郷を出十六歳にして剃髪受戒せし其後四十歳乃秋比より重病を請九ヶ年の末に至りまで医術を尽すといへども死既に極まれり是定業なるかと心につくづく前後を案ずるに己小躰にして我父母に先立ん事を悲しみ偏に地蔵菩薩に遅命を祈り奉る自ら親の歎き骨髄に通りて一心に地蔵菩薩に誓願をこらし我は菩薩の慈悲を蒙て父母存生の内命を延ることあらば尽未来際に至る迄存生此為り菩薩乃法利益を勧め尊像を造立して存生に作依せしめ供養を不怠しめんと誓ひ其夜不思議の霊験を蒙り重病速に快気を得其後は諸国を巡り無縁乃衆

生に多縁を結ぶべし我又世々生々を経とも此願を怠ざ
るの誓約の為に地蔵菩薩の像を安置して七の難苦行を修
せり第一に指焼是は左の小指を油に浸し二首め上焼
焼ぬに供養を第二に手焼是は一七日の間毎日手の内
に油焼仁を入て是又焼ぬに供養を第三に手香こ
れハ三七日の間毎日伽羅沈香を粉にして抹香こ共
村上三寸の間に焼香煙を供養を第四に六万度
の礼拝是は七々日の間毎日立て地蔵菩薩を一千三
百六十度宛拝奉て都合六万礼第五に水中礼拝
是は極寒の内に三日三夜水中に入て一度あびて
地蔵菩薩を拝する三度づゝ都合三千礼に一千度の垢離

第六に百万遍の称名是ハ一七日の間飲食を断て
不断にして地蔵菩薩の名号を唱たり第七に六万巻
の読経是ハ六十日の間立を延命地蔵経を毎日六
十巻宛読誦して都合六万巻に及り是等の事を
書面に委く人の物を省と名利を求に似よりて隆
たるハ兎予我誓の虚妄に非ることを示て老男老女
の信を勧て尊像造立の我願に成就をしめんが為の
方便也我先年此地に来て此物語をもて昔
今我志るハ無比後ハ二度許に来て諸人をすゝめ
奉納の六地蔵に同じ御当地の入口毎に一体宛
金銅仏を丈六尺の地蔵菩薩を六所に都合六躰造

益ならざれば釈迦如来仏観世音菩薩に告て曰汝神力をもつて此衆生を
付嘱し娑婆世界の衆生をして百千万劫安楽ならしめよと
地蔵の神力を見るに恒河沙劫にも説尽し難し見聞瞻礼する事
のあるもせば人天を利益する事無量のうらんにしかも恒河沙
仏の国土につく所也と云云 経には地蔵菩薩の利益を衆生に告させた
まへり 釈尊が観世音菩薩の請ふ故地蔵の利益を弘く衆生へ偏

として天下安全武運長久 御城下繁栄の為
には又往古以来の一切衆生へ普く縁を結ばせんと誓
帝都六地蔵の濫觴は人皇五十四代仁明天皇
御宇参議小野篁卿為利益の多きを思惟ありし
六躰の能化あらはれんとて自六地蔵を造立して天下
全家祚延長楽陽経業を祝し諸人へ性来
間に安置して一切衆生に周縁を結ばしめんとぞ
然るに今の六地蔵是也 我説須言とおほくして分六体
尊像造立を信じ此書見ん方の人々昔志を起して
宿縁の根ふく助てとかく志を我往生せしにおゐて
其恩を報し大凡此尊像造立は国土あらん限の

あるとも今羽仏されたる火災にも滅せず一丈六尺の大像なれ
我亘城のちもあらしめ給し諸人往来の巷にたてれば一切衆生
一会悪縁を結ばする御仏は神明佛陀の加護を蒙らん
のほとの尊像を立つく造立して万代乃一切衆生にこそあり
しく若衆に知らん事を

⑤
釈尊地蔵菩薩が娑婆の衆生を観世音菩薩に附属せり

観音の御手を十八般我の罰と開きに擁護の聴を垂るべし其人のおこなひにおいては
我が心をまかせ奉らんと観音菩薩色縁結ぶの人々は此理を知べし志を起て此世を偏に仏に
弘めて此世も後の世も実ハ我が恩を報じ達にくはりゆき極楽にて法界結縁の為に広く
衆生の人々此土を発て是余に於て仏に帰依せん人は守る所是を失なひ給ふ人は仏ゆゑなり志
を起し給ふ人仏に随ひ奉るべし給ひて一切衆生に広く法地蔵井の法経を読むに同じ
く我に地蔵観音の御利益あり二世安楽を得給ふしかのみならず浄土に帰入ゆる
善知識へ告げ奉る我地蔵井并に広大慈悲と衆生の為に此世に一切衆生利益の
事を成就にすらんと深く誓ひ給ふまで末世に於て功徳の及ぶ所を知らず念仏の
善知識説法に依て色縁に随て六地蔵建立の利益を衆生に弘めぬを
多く我ものの内に於て度へ仏書に是て其道に報ずべきなり

于時寶永三丙戌暦仲春吉祥日

勧化之沙門　深川地蔵坊正元謹言

地蔵坊

○帝都東都並に六地蔵出現之別紀

抑帝都六地蔵の濫觴ハ平安城乃御開祖　桓武天皇より五代
仁明天皇の御宇参議小野篁卿思ひ召なましくも大徳の如く冥府におもむきて
法界八万の地蔵菩薩を自ら礼拝彫刻して天下安全宝祚長久洛陽繁
栄と祝して諸人の往来する街に安置して一切衆生の菩提を済へ
給ふ之より以来一千年に及ぶと雖も代々の天子平安の都を去らせ給ハず
御湯殿に繁栄し六地蔵の尊像を木仏なれども焼失も無く今に
至て今も六躰ながら安置し給ひて益々利生往来の諸人を済度結縁し
御江戸東広大の地くに以て五境守護仏の徳一と致に御当地と天下
大君御在城と御定め　東照大君より初めて当
立五代の御当らせ給ひて金銅丈六の六地蔵の尊像　御当地に又出現

あること不思議の異なれバ天の因地乃理ハ地に理人の和に帰る

こゝや去元正一紙半銭の善をもて之を地蔵菩薩乃奥像に往を

御城下の諸人を勧め像造立を僅に忽数千万人の影をあつめて金胴

丈六の尊像既に勝年縁に　御当地万代不易の天下乃

御在城として　大君の御代〻に同く千代万歳に治らせたまひて

御城下永く繁栄し六十余州の老若男女大府の首尊く

此尊像に法縁を結ぶをたすけ利益広大の地ある事を大士誓ひて

出現ありしことも寔に難有事や殊金胴も丈六乃地蔵の御利益

本邦の内にあて今此造立の尊像を尊く拝もこれも恐ならず

当大君の御徳再明ある　御威徳に依りて成就

宝永五年戊子孟春大吉祥日

勧化沙門
地蔵坊正元謹記 [seal]

○ぢざうぐわんりきのありがたきこと、びよけんきやうにとくがごとし

ぢざうぐわんぎやうのしやうとおんせるに、ぢざうぐわんりきはよたいならず、おんそう

かうくのたぐひに、くそんがつぐむしかくげんざいにたよらいのぞうぜんなてから

さんしあひておんさのつさのあくぞうかつつりくいまそうかくむくれざい

ぶつとあそうせたまふなり。さらにだい一のかけなてあやくれはうとあられ

こたまひげんぜみらいのくげんとつらびきたまふ。りんねなよたいのあんらり

よりくごくにいりつくのかよめんのさんのこうてとまもらせたまふことどもりく

あんあるひとへさせんらうなるくともにさともぢざうぐわんにあんとむすび

つるのみねんどたてまつるに。うくさんのこうてとまもりせたまひくけうくの

さいりそのぞうさおんぎんのひかりとこうさあんとおり。おくしいさいのうらぶ

こころざしおうせうさんなぢざうぐわんとねんせんむしまるとこれこすふれう

あそぐくぞうじ。ひとつにいうんじゆうまんかにかはたおもへうちやうとん

こうつのいたちなさくくぞくりやうむびやうそくさいにてむむ

ふいむすいてざいにつつにいかはきうごとりまことみきりのためにいく

たんじやうあんちいのことわるへかれにあり。このゆへにとやよのぢざうそうさこと。

まくへんらかびのちざうをよにうやまいたてまつるものはたとひけんぜにてもこゝろに
ふでにおさめこゝろをもつてこれをかくものはみなもまたしびのすぐなるゆゑなりつゞきにぢざう
ぼさつをねんずるひとはおのづからひがみあるこゝろをまぬかれずなりちぢざう
ぼさつの十二だいぐわんのうちにもいつさいのしゆじやうたんのゆゑにしてよろしくねんずる
ものゝいのちをのべたんがためにせうがくをとぐしこのあくにおわりてんじやくゑんしゆ
しゆめうしてまたもんのまへくとこけをつゞきにちざうぼさつをねんずるひとはおのづからゆたかなれ
してつきかゝばやともちぢざうぼさつのかたけのあしきゆんもとゞろくすべにたゝへ
しゆのいのちへのあくしゆもしまうさとけんどもたゞさよろしくなるへくとしてまづゞしゆ
くさりこのなかみかばいのなかごとをりなうやてこけをとつゞきにちざうぼさつをねんぜる
ひたすらめいたこんのさくてうこひものてうわいそうけてみまうりてとうへうおそ
おとこにんにもこれをかとかのいのびにんわいにおうせうれんへのぞくひとつもかくいかに
かるもしとおうれなかにひとつくしものあへわいにおうてうわいちかのめでたくそとけもとつゞきにちざう
かさうをねんずるひとはみなもとをしてしおうさはれわくひあうとうけとどうひおうとつぞもへ
けるくのひおうくとすくいのかなうおうこれまかにおかくしあつやくおもへくとむくすのへの
しよのめでたくもとこけもとつゞきにちざうかさつをねんずるひとはみなつくのみかく

いのちをすてどもまくこすいかんよおかてことかつせんあるへいまつくさうさう ぐへのあんふ
もわすさるありこうかれみかにおかくむすいそさいむさうぞくやくかまのくにとなり
つぎにちざうかさつはみらくしやうしやうくとよくまりせたまふふちゆゑみんのいのりせ
たまへるさいぞのいつくいちかうぶんくぶんくよみらくよくこのみやじたんにねん
するものはいちぶんくのよくくだめすぐるありこうやうかれあみふひろくさうふせう
みらくしやうりともくとこけもぞをじてだんふつはみちようせうじやうかうはこれなく
にかゝあるだんがつまんかうまにちざうそれ二十のこくにとめれりつぎにちざうほ
さうをねんずるひとはかんようたいしゆくゆめやよみあれどもそのひとをおかぜんのあん
ちういまけんかうたいしんさちしんかうびのひろくのみんぞくれしんゆちやはてある
ことをぞてわろくのさいかんとのぞんちういありやともちざうかさうをねん
するひとかんげさせあんをものはれしまよくふとかいせれどもしよくすこやかにそんぜさ
たいさんをことさたまふありつぎにちざうかさうをねんするひとはいつさいのさいやう
ことくせうやくすこやかにあつだすとしやうせうわたまんとありさやうれよみかにお
かくぞくしやうせりしやうさいかいのみやくをとけかやうもけんぜのしやよいくるんしやう
しやうすさもこらあかさいをしやうせうすへくさやうれもいんよおかくにしやうるに二世のらうん

りうまんぞくせうわたやまへしよくにおんりやうとおんちりやうあるべしかのそつそのいくさ
つて天おりいもんをしぐくぐしてのすぞれくふうをむりんちごくにてせんぞのてんにむま
やうおもんかうさいはり。たるにちぞうかさろうをねんぜるひとへずあうち△き△くのつこを
やうむかんのがうをてんへてかさいをせうそくせうわれたやまへしこてゑうゐんわりてあうん
いうんやうすいうつきがうちさちごくのがういんなおいてとぞ
○ちぞうかさろうあさんまいぢんをびよたうさうれたらぞすゝむるうす
たうくたよにいりくむりしわたうやさでられまへたう。ゆんへあいじおてちぞうかさ
つのはけでの万くられせんのあぞくをそうけてちごくのこやうつとおとれはだいだ
ひたんとりくざいめんのくふうあり。りくの大あかやうそげじびやうごうれたうひとぞや
うずそいへもじあんの大あせうかさいどすることおこさとおんしゆんなうりあべしりつ
りうの大あせうにつけてられはあんとむとぞうわあうびよちごくのうるしことたやかよ
このなまへりのりやうもちぞうかさうあずじのあんとしもむすべるのなあくおたれく
なまいくじんがこうらいなおりくがりそうしこともゆいくすくませたやあり。おこに
ゆうさがうばけのゆうさうかよろいのそでおちぞうかさうのやうかどひたびはこう
けしみなよろくむりんちごくのうしこときまうれわれこのちうかよひたびちぞうか
うたいでしみごくこういでふよかうくりでんにやうがらにわそびしおさあど
へたりわれていさごにちごうれおんてたと大がにくゐうずいのあんをまねかれ。万のやさ
しわれりうとくへちゞううがうつをねんでたかちにやかりんぬめくききあたいのおそうたかんへ
たんあいやうてちぞうがさうつとねんでおぞんとあいのあねんのいのちにのへあたら
のうんだれつかゞへちぞうかさうのことうへむつてすくやにおんさんのひがをこさうく
やされちくやんなやしやかりしのへとまへあうしてちぞうがさうてぬよいか
うあのをあでぶくうおさいのこくあり。ことのへのなめしとのかさうかさうと大あへでさう
ぞくのあやうこゝあんとのがれあゝくのぞうかうへけくさんざん大あじかごかぞうがさうと
ねんでてちあざんべうとあうのりのやうあよへちぞうがさうとねんでおいさやゝれ
そくをおてでゆんのつまてありかうりあんざへゆんへゆうこゝはちぞうかさうねんで
けんださわれあんとのがれなずみおもへちぞうかさうとねんで六あんとのかれわおやおどろ
やさのへゝまさいちぞうかさうとねんでがういやうとあかれうつひあたくのでうこう
どうへかけとゆくちぞうかさうかひとつのあんとさつりておあくのさいめんとたせけ
てよのこぐりあうくちうれやうしいちぞうかさうとねんでくやゆやにふゝうしんの
あんとのかゆおろいたゐへんとみのつせわさやゝかしくがいとすくいおゝやうおたうど

りやうぜうせうらびさなりかこれいれぬいのまいだんやせう、ともらにしやうてうに。
いくせんまんくいふとも、さいだいおんちぞうまいだんさまどのあくよににしんべうり。
らろぜいんびとべらぞうがさうのちぞうぬでもゆくぞうぬでもりくめてぐ
ぜうすゆしいさのうちにありてとこれちにけらちてともろくのてんほあくちえんあへつさ。
おこれくちつくしわこうそこのがきうれはおんみさふうさうがゆくよおうい
いすいうんやあんげんあんぞくがいおよびりやくのさらうんとよけなまあやうりかやとを。
ぜんばやうがさいのこころゆちくふおそりておがくえりぞかぞうともまみせた
まふもこのがさうれおんちうはよすぎたるにしまきりろくのあくがらとつえりざい
ぢごくにおちてぜんぐうまんぐうれおいたぜぜうねやさいしやうねつれおかのさまよといがこが
それあるいはぐまんのまんのこをうまうらまでむやちやうれたるしとまけていづるど
のあさぎゆんもゆいくともだなまやともこやうしやうりぜんゆんもあく
ゆんもおそしくこのがさうやあんとむすびてそまうしまきすざいしぶもちよせれ
それらぢぞうがさうをこふせずとやにてんづれたるしをたけあんなりたちやいゆにわた
まふあうわるいまいさたちじおさあごのさうやもけづみむおまもまいゆりちまへ
いさしてろくちぞうへのこころざしにておんねんぶつありともちぞうれあうどうありと

ころわかまうさ六ゞとれ六へんとなへてまうすともすこしのぜんこんのちからあれはちぞう
がさうのそぐくふかるさいるかゆへなへたいのあまあくとうなりまくこころざしせおと
あそまいふち百へんとなえけんぜのろくのきよりとのぞきおんかくみちもあとう
らいあるにぶつだうをあかうせんぜいわくがうにひかれくぜんつよたざいをとるそのくにいたり
てげざうをわくあんとのおんちうは二千里をりおんやせんべいやんはおうみ
ゑどくをやわらをもちぞうがさうのころざをとなうるはずおうらいぞうだらいかくさんらんの
あんぶつさうれいをもちろんせぜひさずじやあむちぞうかさうをとなうるだんりにくむやまう
けぞくをあげんせうらいのあまかうんとあまうしぜじめたなあるかくのごとくちよくせきゆう
のおひろかうせいあるこをとあまりあるむろくしやうとおもひあんのあまあまうと
おりゆくとまさとにろおもかどともあまきまいとうけてあのりんはいつるいさ。
こゆるとあんでのかいあるともしひとくのひあまりやもうちつくしたとへは
たけくあいまうのごとしおんくへなそきちまうふかへぞうあんのてあいうら
のごくかひくざびやうぐるむしきのおかきあいねつかおのほくすえみなくあ
たちのがんさうおたなまいとけするにころそでざうさんやときされあくろく
るんかよさいみあてきこもよへでれだいがせんくるよへあきたらさんぐあも

ごとくもなにゝしてみんのちうだいをわうじやうはおほどうおちくのくさみれいだされ
これよりれんやおりせずりかつべきよりきたちのあひごおりてとそあおしみとおる
のんどにせよ川くぐるりともあさきさきるなしおるにいまちぞうわうさがずし
此ぼんきもむすべきりのゆわうつれたくおりきさせたまいわおるにとれらく
にくろくざいにうきまねく三ゝしわおるにさつのきゝどくいざらいておんぐと
あやてわおるにこそのねがひよきさうてすこやにさまつのきゝどくに
こらひきたまよとりかうしいちゆびとくぞたいぶやゆう此ちうせもちみ
ぶらむかくこれときんくのどろかうぞみよくのなりにまりてゆちやよ
りうくのわくぐうどうそりあづく六たにいおりせんへまとふあさ同りずくせ
くみすさこの一をきるとたも地わくなんいのかぜひるのされせんなかうそきり
するとゝにいねかくいまらんのひをぐりうちりけんをそかでひかのこの
かさうぞうかりしあしてきさるぐ二せの方んりふ　きゝう　あうぜんをを

ふうかく　ちぞうぼう　〓〓げん

地蔵坊

一 当寺六地蔵の造立初発の事　小野篁卿愛宕源川神田此三所の神前千日
参りを主ル　寿永三月廿四日初め　成て三月廿四日小縁せしめ畢
一 地蔵菩薩絵像大小数紙書いろ/\弘法大師御真筆一巻あり
一 地蔵菩薩霊験記　書せし書物ハ　▲地蔵霊験記　▲利益集
▲利生記　▲秘記　▲延命和讃抄　▲同口決　▲礦石集等あり

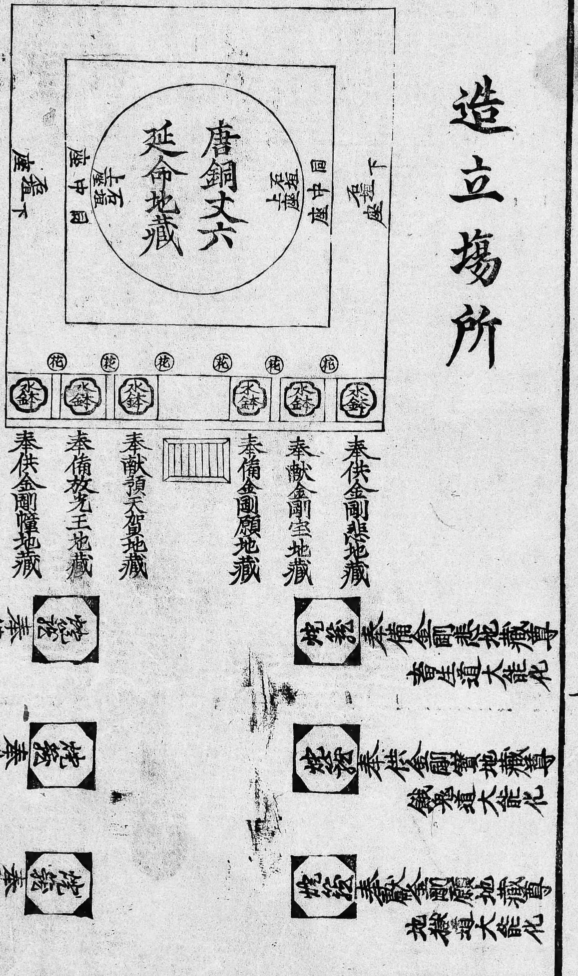
以上

覚

一 地蔵菩薩御身并蓮花座何も唐銅也
此度御鋳直ニ付　代金弐朱宛之
一 地蔵菩薩御身は金箔三通だまあり
此金箔百枚ニ付　代金壱分宛之

一 三重之石塔　此石壱ツニ付　代金壱分宛之
一 石燈籠　壱ケ所ニ付　代金六匁宛之
但壱ケ所ニ六灯ツヽ。是六地蔵へ供養之六ケ所ニ而都合卅六基之
勿論施主方の御俗名戒名御望次第ニ彫付申候
一 石之手水鉢　壱ツニ付　代金弐両弐歩宛之
右同所勿論施主方の御俗名戒名御望次第ニ彫付申候
一 常夜燈　永代之御施主　金拾両宛之
一 昼夜常燈　永代之御施主　金五両宛之
右何も五人三人十人二十人ツヽも御寄合ニ而成るとも
御寄進可被下候
一 為回向百文ツヽ御寄進の御施主ハ御俗名戒名ハ金銅仏の御胎内
心の上へ加り候ヽ申候又壱銭弐銭の御こゝろざしハ御俗名戒名
何も御縁結ニなし置申候

造立場所



大概之圖